

鳴滝塾で学んだ塾生

湊 長安 天明6年～天保9年（1786～1838）

宮城県石巻市生まれ。若くして医者を目指し、江戸に出て吉田長淑の学僕となった。また、大槻玄沢の芝蘭堂で蘭学・蘭方医学を修め、江戸で医業を開いた。1822（文政5）年37歳のとき、長崎に遊学して吉雄幸載の門をたたいた。翌年シーボルトが来朝するや、いち早くその門弟となり、出島のオランダ商館や鳴滝塾に出入りして教えを受けた。文政8年江戸参府のシーボルトに随行し、植物等の標本を採取して師シーボルトを喜ばせた。江戸に帰って医業を再開すると、シーボルト直伝の内科医として評判となった。これを伝え聞いた丹波国（兵庫県）篠山藩主から召し出されて侍医となった。傍ら私塾丹晴堂を開いて門弟の指導にあたった。

当時、出版された「厚生新編」の訳者の一人であったところから、幕府の天文方への出仕を命じられた。

美馬 順三 寛政7年～文政8年（1795～1825）

徳島藩家老池田氏の家臣美馬茂則の次男として徳島県那賀郡に生まれた。文政年間の初め頃、医者を目指して京都に上り、広く良師を訪ね歩いた。やがて長崎に遊学してオランダ通詞中山作三郎宅に奇遇し、唐通詞周竹溪から中国語を学んだ。後にオランダ通詞猪股伝次右衛門、吉雄権之助、吉雄忠次郎らについてオランダ語を修めた。作三郎の紹介でオランダ商館長ブロンホフを知り、同商館への出入りを許された。1823（文政6）年シーボルトが着任すると、湊長安、岡研介らとともに率先してその門人となった。オランダ語に長じていたため師シーボルトから特別の信任を受け、翌文政7年鳴滝塾が設けられると、研介とともに初代塾頭に選ばれた。賀川玄悦著「産学」や石坂宗哲著「鍼灸知要一言」を蘭訳して提出した。両論文は後にシーボルトの手により、順三の名で「バタビア学芸協会雑誌」「ドイツ産科年報」などの学術雑誌に発表された。これらは、ヨーロッパの学会誌に掲載された最初といわれる。鳴滝塾の塾頭として多くの後進の指導に当たる一方、シーボルトの著述編纂に積極的に協力したが、当時、長崎で流行したコレラに罹って客死した。年31。

岡 研介 寛政11年～天保10年（1799～1839）

周防国熊毛郡平生村（山口県熊毛郡平生町）の眼科医岡泰純の五男として生まれた。13歳のとき熊毛郡の医者志熊氏について漢学を学び、その後各地を遍歴して漢学と医学を修めた。1817（文化14）年安芸国広島城下の蘭方医中井厚沢の門をたたき、さらに広島藩医後藤松眠に師事した。1819（文政2）年帰国して阿武郡萩城下（山口県萩市）で医業を開いたが、蘭学を学ぶには先ず漢学に通ずべしと翌文政3年豊後国（大分県）の儒者広瀬淡窓に師事した。文政6年にシーボルトが来朝すると、翌文政7年26歳のとき長崎に遊学し、先ずオランダ通詞吉雄権之助の塾に入り、次いでシーボルトの鳴滝塾に学んだ。当時、読書力は高野長英が研介に勝り、文章・会話力は研介が長英に優れたり、といわれて師シーボルトから厚く信任され、美馬順三とともに鳴滝塾の初代塾長に選ばれた。1830（天保1）年に年来の学友坪井信道と江戸に向かったが、途中大阪で同郷の蘭方医斎藤方策と意気投合してここで医業を開いた。天保3年一旦帰国すると、周防国岩国藩主吉川候から召し出された。翌天保4年大阪に帰ったが、数年して精神病を発し、帰郷して療養の日々を送った。

高野 長英 文化元年～嘉永3年（1804～1850）

伊達家の陪臣後藤実慶の三男として陸奥国胆沢郡水沢村（岩手県水沢市）に生まれた。14歳のとき母方の伯父の医者高野玄斉の養子となった。1820（文政3）年江戸に出て蘭方医杉田伯元に学び、次いで蘭方内科医として聞こえた吉田長淑に師事した。文政8年22歳のとき長崎に遊学し、シーボルトの鳴滝塾でオランダ語と蘭方の修得に努めた。翌文政9年には論文「鯨魚及び捕鯨に就きて」を師シーボルトに提出し、ドクトルの称号を授けられた。足掛け4年、鳴滝塾で研鑽を重ねたが、文政11年シーボルト事件が起こると、いち早く姿をくらまして熊本、大分、広島、尾道、京都など各地を

転々とし、1830（天保1）年江戸に舞い戻った。江戸では医業の傍ら訳述に専念し、天保3年にはわが国初の生理学書「医原枢要」と、蘭方の臨床参考書「居家備用」を著した。この頃、渡辺崋山・小関三英・鈴木春山らと親交を結び、尚歯会を結成して時事を論じた。大飢饉に際しては「救荒二物考」を著し、また異国船打払令が発せられると、「戊戌夢物語」を書いて幕府の対外政策を厳しく批判した。天保10年の蛮社の獄で永年の刑を受けたが、獄中で「蛮社遭厄小記」を著してわが国における蘭学の沿革、尚歯会の活動、事件の経緯などを論じ、幕府の蘭学抑圧を非難して無実を訴えた。1844（弘化1）年獄舎の火災を機に脱走し、宇和島、広島、鹿児島、木曾、宇和島、江戸と潜行を続け、その間に翻訳作業と門人の育成に携わった。1849（嘉永2）年江戸に潜入して沢三伯の名で医業に従ったが、翌嘉永3年江戸・青山の隠れ家を幕吏に襲われて自殺した。著訳書は49部300巻の多きにのぼっている。

二宮 敬作 文化元年～文久2年（1804～1862）

伊予国宇和郡磯崎浦（愛媛県西宇和郡保内町）で農業の傍ら酒小売を営む六弥の長男として生まれた。早くから医者を目指し、1819（文政2）年16歳のとき長崎に遊学した。オランダ通詞吉雄権之助・吉雄忠次郎から蘭学を、また阿波国（徳島県）の美馬順三から蘭方医学を学んだ。文政6年シーボルトが来朝すると順三とともに率先してその門人となった。これ以後6年間、シーボルトに師事して信任され、鳴滝塾ではシーボルトから課せられた調査や翻訳などに携わって学資を支給された。また刻苦勉励して外科の修得に努めた。文政9年シーボルトが江戸参府する際、高良齊らと助手として随行し、富士山の高さを測定するなどした。これは洋式測量術による測定の嚆矢とされている。文政11年シーボルト事件に連座して一時投獄された。翌文政12年には国外退去を命じられたシーボルトから良齊とともに娘楠本イネの養育を託された。1830（天保1）年帰国し、天保4年宇和郡卯之町（東宇和郡宇和町）で医業を開いたところ、懇切丁寧な施療と貧者への無料診療が話題となった。1844（弘化1）と1854（安政1）年の両度イネを引き取って教育し、シーボルトの恩に報いた。1848（嘉永1）年には脱獄・逃亡中の蘭学者高野長英を自宅に匿った。また周防国（山口県）の村田蔵六（後の大村益次郎）が来藩して蘭学・兵学を講ずると、盛んに親交を重ねた。安政2年には宇和島藩医に挙げられた。安政3年再来日するシーボルトを迎えるため、長崎に赴いて医業を開いた。翌安政4年脳出血で右半身不随となったが、左手だけで巧みに手術を行ったといわれる。安政6年シーボルトが再び来朝し、ようやく再会を果たした。シーボルトに従って江戸に出ようとしたが、またしても脳出血に襲われたため長崎に留まり、3年後に長崎で客死した。

高 良斎 天明8年～弘化3年（1788～1846）

徳島藩の中老山崎好直の妾腹の子として阿波国名東郡助任村（徳島市）に生まれた。後に同国徳島城下（徳島市）の眼科医高錦国の養子となった。幼少の頃から学問に親しみ、13歳のとき養父錦国から眼科を、また乾純水から本草学を学んだ。1817（文化14）年19歳のとき長崎に遊学して吉雄権之助から蘭学を学び、1822（文政5）年帰国した。翌文政6年シーボルトが来朝すると、再び長崎に遊学してその門をたたいた。師シーボルトに刻苦勉励する姿を認められ、周防国（山口県）の岡研介、同郷の美馬順三に次いで鳴滝塾の塾頭に挙げられた。文政9年には伊予国（愛媛県）の二宮敬作とともにシーボルトの江戸参府に随行を許された。文政11年シーボルト事件が発生すると、翌文政12年連座して獄に繋がれたが、半年後に放免となった。同年、国外追放となったシーボルトから、敬作とともに娘イネの養育を託された。1831（天保2）年徳島に帰り、医業に従う傍ら蘭学を講じたが、漢方至上の徳島の空気になかなか馴染めなかった。天保7年家督を継母弟の定国に譲って大阪に移り、医業を開く傍ら私塾で蘭学・蘭方を教授した。相次ぐ天保の大飢饉と大塩兵八郎の乱のため、医業は振るわず困窮したが、その後、診療を請い、従学するものもようやく多くなった。天保11年播磨国（兵庫県）明石藩主松平侯の眼科治療に成功すると、しばしば召し出されて治療し、客分の医員に迎えられた。「蘭法内用薬能識」「驅梅要方」「耳目詳説」を初め多くの訳著書がある。

石井 宗謙 寛政8年～蔓延2年（1796～1861）

美作国真島郡旦土村（岡山県真庭郡落合町）の医者石井信綱の子として生まれた。15歳のとき父信綱を喪った後、郷里で医学を修めた。1823年（文政6）28歳のときシーボルトの来朝を知って長崎に赴き、その門をたたいて蘭方を学んだ。またシーボルトの命を受けて「日本産昆虫図説」「日本産蜘蛛図説」「鯨の記」などをオランダ語に訳するなど、卓越した語学力を示した。文政12年師シーボルトが国外退去を命じられた後も、しばらく滞留し、やがて帰郷して医業を開いた。1832（天保3）年勝山藩から藩医に召し抱えられ、真島郡勝山城下（真庭郡勝山町）に移った。その後、勝山藩医を辞して備前国岡山城下（岡山市）で開業した。1845（弘化2）年師シーボルトの娘楠本イネが岡山に出てくると、これに産科を教授し、1852（嘉永5）年イネとの間に娘タカをもうけた。翌嘉永6年江戸に出て再び勝山藩医に挙げられた。この頃、外国船が相次いで来航したため、蘭学の知識を買われて幕府に召し出され、1855（安政2）年蝦夷地（北海道）の箱館奉行所通詞を命じられた。翌安政3年には蕃書調所に出仕して外国文書の翻訳に携わった。安政4年伊東玄朴ら江戸在住の蘭方医83名が神田お玉ヶ池に種痘所の開設を計画すると、これに参画した。晩年は芝愛宕下で開業した。

小関 三英 天明8年～天保10年（1787～1839）

庄内藩の足輕組外れ小関知義の次男として出羽国田川郡鶴岡城下（山形県鶴岡市）に生まれた。初め藩校致道館に学んだ。1804（文化1）年江戸に出て吉田長淑から蘭方を、馬場佐十郎から蘭学を学んだ。この頃、高野長英との親交が始まった。1821（文政4）年帰郷して医業を開いた。翌文政5年大槻玄沢の推挙によって陸奥国（宮城県）仙台藩の医学館講師となったが、文政6年辞去すると、小石元瑞を頼って京都に上り、その医業を助けた。その後、元瑞に勧められて長崎に遊学し、シーボルトの鳴滝塾で蘭方と蘭学の修得に努めた。ここで長英との親交はさらに深まった。文政7年業を終えて京都に帰り、再び元瑞のもとに寄寓した。翌文政8年に藩医として和泉国（大阪府）岸和田藩に召し抱えられた。文政9年にはドイツ人コンスブルックの内科書の蘭訳本を翻訳して「泰西内科集成」と名付け、後にその提要を「西医原病略」と題して刊行した。文政10年江戸に出て湊長安宅に寄寓し、次いで桂川甫賢の食客となって蘭書の翻訳にあたった。この頃、渡辺華山を知った。1832（天保3）年華山の推挙によって再び岸和田藩医となった。天保6年幕府から天文方訳員を命じられ、馬場佐十郎らが始めた「厚生新編」の訳述に当たった。この頃、渡辺華山、高野長英、鈴木春山らと尚歯会を結成し、幕府の救荒対策や対外政策を中心に時事を論じた。天保8年のモリソン号事件を機に華山・長英が激しく幕府を批判し、天保10年蛮社の獄で逮捕・投獄された。これを知った三英は連累がわが身にも及ぶと覚悟し、自ら命を絶った。

伊藤 圭介 享和3年～明治34年（1803～1901）

尾張国名古屋城下（名古屋市）の医者西山玄道の次男として生まれた。後に父の生家伊藤家を継いだ。幼児から植物に関心を示し、父玄道や兄大河内存真から医学を学ぶ傍ら、植物の和名・漢名を問い質した。後に尾張国における本草家の盟主水谷豊文に師事した。1820（文政3）年医師の資格を取得し、翌文政4年京都に上って蘭学者藤林普山に従学した。名古屋に帰った後も吉雄俊蔵のもとで蘭学の研鑽を重ねた。文政9年師豊文や兄存真とともに、江戸参府途上のシーボルトを同国愛知郡熱田（名古屋市）の宿舎に訪ねて教を請うた。翌文政10年25歳のときシーボルトに勧められて長崎に遊学した。オランダ通詞吉雄権之助のもとに寄寓し、約半年間シーボルトから博物学などを学んだ。文政11年長崎を去るシーボルトからツンベルクの「日本植物誌」を贈られると、これを基礎として植物の学名と和名・漢名を対照した「泰西本草名疏」を著した。またその付録にリンネの植物分類体系を紹介し、翌文政12年刊行したが、これはわが国植物学の基礎をなす画期的な労作とされている。この前後、しばしば諸国を遍歴して植物採集を続けるとともに、本草学会の嘗百社の中心となって活動し、名古屋や江戸で植物標本の展示会・博覧会を開いていった。天保の大飢饉に際会すると、1837（天保8）年「救荒食物便覧」を著した。また天保12年「泰西種痘奇法」を校閲して「イギリス国種痘奇書」を刊行し、牛痘法を紹介するとともに、種痘の実施・普及に尽力した。1859（安政6）年尾張藩医に挙げられ、洋学館総裁心得に任じられた。1861（文久1）年幕命により蕃書調所に出仕し、翌文久2年物産局教授を命じられたが、文久3年これを辞して帰郷した。1870年

(明治3)年東京に出ると、新政府の命で大学出仕となり、専ら小石川植物園で、植物学・博物学の研究に没頭した。明治10年東京大学理化大学員外教授、明治14年教授となった。明治21年に学位制が設けられると、わが国最初の理学博士の学位を授与され、翌明治22年には東京学士会院の会員に推された。明治34年永年の学術上の活躍・功績に対し学者として初めて男爵を授けられた。明治13年にはストックホルム王立学士院から銀杯を贈られた。著書としては「日本産物志」「小石川植物園草木図説」など多数がある。

武谷 元立 天明5年～嘉永5年(1785～1852)

代々医を業とする武谷敬明の次男として筑前国鞍手郡高野村(福岡県鞍手郡若宮町)に生まれた。若くして同国福岡城下(福岡市)に出て福岡藩儒者亀井南冥・昭陽父子に師事した。その後、各地を遍歴して漢方を修めた。業成って帰郷し、家業を継いで父敬明と同じく鞍手郡頭取医兼産児養育係を命じられた。壮年に及んで古医方に飽き足らなくなった。1825(文政8)年シーボルトの門人で備前国(岡山県)の児玉順蔵が帰途の途次、武谷家に滞留して蘭方と蘭学を講じると、百武万里・有吉周平・原田種彦ら10数名がこれを聴講した。文政9年江戸参府途上のシーボルトを児玉とともに鞍手郡木屋瀬駅(北九州市)に訪ねて歓談した。翌文政10年43歳のとき百武・有吉・原田らと長崎に遊学し、シーボルトのもとで蘭方の研鑽を積んだ。文政11年師シーボルトの帰国が近づいたため帰郷した。同年、シーボルト事件が突発すると、同門の高野長英・平井海蔵らを寄寓させて教えを受けた。長崎から高野村に帰った元立は、古医方を棄てて蘭方を唱導したため、村民の不評を買った。また、しばしば瀉血療法を施したところから、人の血を採りて魔の神に捧げる、と誤解され、一時は治療を請うものも途絶えて困窮した。その後、徐々に蘭方の効験が知られ、村民にも信用されるようになった。1841(天保12)年には筑前国那珂郡博多(福岡市)で百武万里・谷仲栄らと腑分を行ったが、これは同国における死体解剖の嚆矢とされている。蘭方が広く行われるようになると、その名声は他国にも聞こえて治療を請い、教えを求めるものが多く、門人は他藩出身者を含めて数十名に上った。これより先、鞍手郡頭取医から福岡藩医に挙げられ、その職にあること前後30余年に及んだ。

日野 鼎哉 寛政9年～嘉永3年(1797～1850)

豊後国大分郡湯布院村(大分県大分郡湯布院町)に生まれた。初め同国速見郡日出城下(速見郡日出町)に赴いて日出藩儒者帆足万里の門をたたいた。1824(文政7)年28歳のとき長崎に遊学した。シーボルトの鳴滝塾で蘭方を学び、同地で医業を開いて自らの技を試した。程なく京都に上って小石元瑞のもとで蘭方の研鑽に努めた。1833(天保4)年京都で開業し、外科を得意としたところから評判となり、新宮涼庭と並び称された。また教えを請うものも多く、やがて大阪に緒方洪庵あり、京に鼎哉あり、といわれるようになった。弘化年間(1844～1847)の初め、京都などで疱瘡(天然痘)が大流行し、越前国(福井県)福井藩主松平慶永の世子と夫人も罹患した。藩主から諮問された同藩医笠原良策は師鼎哉に痘瘡の予防法を相談した。シーボルトのもとで牛痘接種法を見学したことのある鼎哉は、その早期導入に努める旨を約するとともに、長崎の唐通詞頼川四郎八に痘苗の入手を依頼した。

1849(嘉永2)オランダ商館医師モーニケがバタビア(インドネシア)から痘瘡を取り寄せ、これを用いて榎林宗建が接種に成功すると、牛痘接種法は九州各地で行われることとなった。同年、鼎哉のもとに長崎から痘苗が伝えられると、苦心の末にようやく接種に成功した。これは九州以外で牛痘接種法が成功した最初といわれる。鼎哉は幾多の迷信や誹謗と闘いながら、京都に除痘館を創設し、その普及に力を注いだ。また緒方洪庵の求めに応じて痘苗を分与し、大阪除痘館の創設を助けた。笠原良策も苦心惨憺して越前国福井城下(福井市)に分苗し、北陸地方で初めて牛痘接種法を実施した。鼎哉が京都に開いた除痘館は経営的に行き詰まり、僅か2ヵ月で閉鎖された。著書に「白神除痘弁」「微毒一掃論」などがある。

岡 泰安 寛政8年～安政5年(1796～1858)

周防国熊毛郡平生村（山口県熊毛郡平生町）の眼科医岡泰純の三男として生まれた。幼児から才知に長けて漢学を学んだ。20歳の頃から各地を遍歴して漢方を学び、傍ら蘭方医を志して究理学（物理学）などを修めた。1821（文政4）年父泰純の跡を継いで郷里で家業の眼科を開業すると漢蘭両方に明るく、内外科に通達するとして大いに評判となった。1826（文政9）年31歳のときシーボルトの高名を耳にすると、家業を抛って長崎に遊学した。阿蘭陀通詞吉雄権之助の塾に入門し、またシーボルトの鳴滝塾に学んだ。この頃、高野長英と意気投合したという。文政10年師シーボルトの証明書を携えて帰郷すると、ますます医名が挙がって治療を請うものは跡を絶たなかった。1844（弘化1）年周防国岩国藩主吉川侯に召し出されて夫人の眼病を癒し、翌弘化2年法眼に進められた。1856（安政3）には藩侯の眼病治療に成功し、翌安政4年侍医に加えられたが、安政5年長崎に端を発したコレラが大流行し、これに罹って急死した。

賀来 佐一郎 文化6年～明治24年（1809～1891）

肥前国（長崎県）島原藩領の豊後国国東郡高田村（大分県豊後高田市）の医者で本草学者賀来有軒の子として生まれた。幼少の頃から才知と記憶力が優れ、父有軒から本草学を学んだ。14・5歳の頃、豊後国速見郡日出城下（速見郡日出町）に赴いて帆足万里に師事し、儒学のほか医学を学んだ。さらに医者天野某のもとで研鑽を積み、1822（文政5）年速見郡杵築城下（杵築市）で医業を開いた。杵築藩主松平侯の病床に召し出されて治療に当たり、藩医として出仕することを勧めるものもいたが応じなかった。やがて長崎に遊学して阿蘭陀通詞吉雄権之助から蘭学を学んだ。たまたまオランダ商館医としてシーボルトが来朝すると、4年間これに師事して蘭方と本草学を修めた。業成って杵築に帰ると、治療を請うものが跡を絶たなかった。これが当地における蘭方の嚆矢とされている。1834（天保5）年島原藩医として召し抱えられ、肥前国高来郡島原城下（島原市）に移り住んだ。天保14年には同藩医市川泰朴と刑死者の腑分を行った。また1845（弘化2）年藩命を受けて7年ばかりで約1町歩に及ぶ広大な御薬園を開き、その経営に当たった。1849（嘉永2）年には泰朴とともに長崎に赴いてオランダ人医師モーニケから牛痘種法を学び、痘苗を持ち帰って島原藩内で実施した。医事の傍ら詩文・絵画を能くし、また草花を屋敷内に植えて百花山荘と称した。著書として「新注傷寒論」「本草新書」「治痘新書」など多数がある。

有吉 周平 寛政2年～天保6年（1790～1835）

筑前国宗像郡南郷村（福岡県宗像市）に生まれた。1825（文政8）年シーボルトの門弟で備前（岡山県）の児玉順蔵が筑前国鞍手郡高野村（鞍手郡若宮町）の医者武谷元立宅に立ち寄って蘭方と蘭学を講じた際、百武万里、原田種彦らと聴講した。文政10年38歳のとき、武谷、百武、原田らと長崎に遊学し、シーボルトの鳴滝塾で蘭方を修めた。帰国後は郷里で医業を開き、郡内唯一の種痘医として知られた。

原田 種彦 天明4年～安政4年（1784～1857）

筑前国志摩郡波多江村（福岡県前原市）の庄屋種得の子として生まれた。幼少の頃から学問に親しみ、早くから医学の研鑽を積んだ。1825（文政8）年シーボルトの門人児玉順三が、同国鞍手郡高野村（鞍手郡若宮町）の医者武谷元立宅で蘭方を講じると、武谷万里・有吉周平らとこれを聴講した。文政10年44歳のとき、武谷・百武・有吉らと長崎に遊学し、シーボルトのもとで蘭方の習得に努めた。帰国後は同国早良郡西新村（福岡市）で医業を開き、福岡藩から種痘医を命じられた。医学を修める傍ら、平田鉄胤に師事して国学を学び、筑前国西部地方における国学の普及に大きな貢献を果たした。晩年は国事に意を致し、勤皇歌人野村望東尼らとも交わりをもった。

後藤 松軒 享和3年～文久4年（1803～1864）

広島藩医後藤松眠の子として安芸国広島城下（広島市）に生まれた。幼少の頃から父松眠について医学を学んだ。1821（文政4）年19歳のとき長崎に遊学し、阿蘭陀通詞吉雄権之助のもとで蘭学・

蘭方を修めた。文政6年に来朝したシーボルトに師事するとともに、高野長英らと親交を結んで、蘭方の研鑽に努めた。文政11年松眠の死に遭って帰国し、家業を継いで藩医に挙げられた。後年、蛮社の獄に連座した高野長英が脱獄して広島に潜入したとき、薬草園の日渉園に匿った。1849（嘉永2）年には同僚の中傷や長英隠匿の発覚によって禄を差し止められた。1856（安政3）年ようやく許されると、三宅春齡らと種痘の普及に力を注いだ。医業に従う傍ら、松眠の跡を継いで本草学を研究し精通した。日渉園の近隣で長茄子の種子を試植し、また堤防にげんのしょうこを播種してその薬効の周知に努めた。

児玉 順蔵 文化3年～蔓延2年（1806～1861）

岡山藩家老伊木長門の侍医児玉泰順の子として備前国岡山城下（岡山市）に生まれた。初め播磨国（兵庫県）赤穂藩の儒医神吉主膳に学んだ。1822（文政5）年17歳のとき脱藩して長崎に遊学した。翌文政6年来朝したシーボルトに師事し、鳴滝塾で蘭方と蘭学を修めた。文政8年帰国の途についたが、途中、筑前国鞍手郡高野村（福岡県鞍手郡若宮町）の医者武谷元立の家に立ち寄り、請われて3年間、滞留して谷元・武谷万里・有吉周平らに蘭方と蘭学を教授した。その後、備中国下道郡箭田村（岡山県吉備郡真備町）まで戻って医業を開いたところ、治療を請うものは跡を絶たなかった。1834（天保5）年その評判を伝え聞いた岡山藩から帰参を許され、伊木氏の侍医に復して寵用された。医業の傍ら、蘭学の教授や蘭書の翻訳に力を注いだ。

岡山藩で他藩よりも早く蘭方・蘭学が盛んになったのは順三の力に負うところが大きいといわれ、その門下から島村鼎甫・石井信義・長瀬時衛・花房義質らの俊才が輩出した。1858（安政5）病のために侍医を辞して大阪に移り、開業する傍ら、蘭書の翻訳に携わった。訳書に「外科原武」「玉海提要」「公氏医宗玉海」など多数がある。

「長崎おもしろ歴史」より